

私の目指す弁理士像

No. 74

会員 井口 和仁

「ココロザシは高く、コシは低く」

この言葉は、受験生時代の講師の口から出た言葉であるが、気にいったので自分の座右の銘にしている。少なくとも、新米弁理士としての自分が、弁理士としての人生をまっとうする時まで「ココロザシは高く、コシは低く」の精神を貫き通すことが、私を「私の目指す弁理士像」に近づけるための一番の近道なのではないかと思う。以下、私なりに考えた「私の目指す弁理士像」について説明しようと思う。

(1) 明細書を書く職人であること

技術書を読むこと、語学力を伸ばすこと、判例を研究すること、そしてプロとして必要な法律知識を身につけること等、弁理士としてやるべきことが色々あると思う。そして、私なりにそれらのすべてに対して最低限の努力はしているつもりである。ただ、優先順位を考慮すると、目下のところ自分の目指すべきは「職人技の如く明細書を書くこと」であると考えている。

(2) 弁理士としての生き方にこだわっていること

私が「弁理士の理想像」をイメージするとき、人懐っこく、それでいてプロフェッショナルな弁理士としてのオーラを発し、エネルギーに生きて人生を謳歌している、そんなイメージが浮かぶ。これについては、以下の(3)～(5)において説明するが、とりあえずは自分が身を立てる専門分野にこだわるより、この私なりの「弁理士の理想像」に近づくことにこだわりたいと思っている。

(3) 「天職」と信じていること

まず、「弁理士としてのオーラ」とは、仕事に対する自信によって形成されるものなのだろう。この仕事に対する自信は、積み重ねられた知識と実績に比例して大きくなることは容易に推測できるが、付け加えるならば自分がこの知的財産の業界で生き抜くために適した資質を持っているものと信じるのが重要ではないかと思う。これについては、自分自身の性質をプラスに考えて、弁理士としての仕事が自分の天職であると心から思える日が来るようにしたいと願っている。少なくとも、今でも時々頭をよぎる「自分はこの業界に向いているのか？」という疑問とは早くお別れしたいものである。

(4) エネルギーに生きて人生を謳歌していること

これは、シンプルに言い換えると「良く学び、良く遊ぶ」ことだと思う。つまり、たとえ月曜日から土曜日に夜遅くまで激務をこなしていたとしても、日曜日は軽やかに寝床から飛び出して、ホリデイを満喫するバイタリティが欲しい。弁理士は膨大な量の知識のインプットが必要であるが、インプットした知識を使いこなす「柔軟な発想力」がなければならない。この「柔軟な発想力」が「アソビゴコロ」を持って余裕のある時間を過ごすことで培われるものだとするならば、「アソビゴコロ」のない者は一流にはなれないのかも知れない。仕事でも日常生活でも常に新しい扉を開く好奇心と、様々な場所で身につけた知恵を他の場所で活用しようとする柔軟性を身につけたいと思っている。

(5) 良き弁理士である前に良き人格者であること

我々の扱う知的財産の話はムツカシイものである。だからこそ、弁理士には「人懐っこさ」が必要だと思う。つまり、ムツカシイ知的財産の話の人懐っこい弁理士が親切かつ平易に説明してゆくことにより、知的財産の話の人を理解させることができるものと考えている。例えば、発明者の中には「井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さを知る」的な存在である人もいると思う。担当する発明者が産業財産権法に対する理解がなかったとしても、発明者の専門性を尊敬しつつ、その発明者と二人三脚をするという弁理士の根本的な使命をいつまでも見失わないでいたい。どんなに仕事に追われようとも「ヒトに優しく」生きる弁理士でありたい。